

令和 4 年 9 月 7 日現在

機関番号：32638

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13396

研究課題名(和文) 19世紀末ドイツにおける人文主義と森鷗外の歴史叙述

研究課題名(英文) Humanism in Late 19th Century Germany and Mori Ogai's description of the history

研究代表者

村上 祐紀 (MURAKAMI, YUKI)

拓殖大学・政経学部・准教授

研究者番号：20758239

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、信仰を失った近代において、鷗外や近代知識人たちが新たな「連帯」の可能性を、ドイツ・プロテスタントの文脈に見出していたことに着目し、「歴史」と「神話」の問題を検討したものである。鷗外が関心を寄せた普及福音教会とその牧師赤司繁太郎について、ドイツ文学・哲学の受容を手がかりに、その影響関係を論じてきた。キリスト教社会主義者であった木下尚江の作品についても検討した。そうした検討を通し、鷗外の「神話」という概念は、単なる「歴史」と対立項以上に近代の根源にかかわる重要なものであったことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドイツプロテスタントは「新神学」の一つとして論じられているにすぎず、近代日本にもたらした影響についての総合的な視点は提出されていない。また、赤司繁太郎に関する基礎的な研究も一部に限られたものであり、鷗外をはじめとする近代知識人との交わりについてもいまだ研究する余地がある。そのような現状から、本研究は、赤司と鷗外の接点を手掛かりに、ドイツプロテスタントに見出されていた意義を明らかにした点に意義があるといえる。

研究成果の概要(英文)：This study examines the issues of "history" and "mythology," focusing on the fact that Ogai and modern intellectuals found the possibility of a new "solidarity" in the context of German Protestantism in the modern era when people lost their faith. The relationship between Ogai and Shigetaro Akashi, pastor of the Allgemeiner evangelisch-protestantischer Missionsverein, in which Ogai was interested, was discussed with reference to the reception of German literature and philosophy. The works of Naoe Kinoshita, a Christian socialist, have also been examined. Through such examination, it became clear that Ogai's concept of "myth" was more than just an antagonist of "history" and was essential to the foundation of modernity.

研究分野：日本近代文学

キーワード：森鷗外 ドイツ プロテスタント神学 赤司繁太郎

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

### 1．研究開始当初の背景

申請者は鷗外の業績を総合的にとらえるための視座として、晩年の歴史叙述に着目し、検討を重ねてきた。鷗外の歴史叙述には、明らかにドイツ由来の近代歴史学の影響が見られる一方、江戸時代以来の伝統的な好古家たちの方法と類似も見られた。一般に近代の学問の確立は伝統的な学問を後退させたが、鷗外はその逆であり、伝統的な学問に近代歴史学の方法を接合させることによって、自らの歴史叙述を生成していったと結論づけた。これらの研究を通し、歴史叙述を対象とすることは、単なる文学作品（主として小説ジャンルに配分されている作品群）の分析にとどまらず、全作品を検証することにつながるという見通しを持った。

その上で、鷗外の歴史叙述を成立させた西欧の知的基盤を具体的に明らかにするため、『棕鳥通信』『独逸日記』の分析を中心に、鷗外が体験したであろう19世紀末世界的規模の同時性を持った人文学的知のネットワークの様態を明らかにする作業に着手した。18世紀から19世紀にかけてのドイツでは、「新人文主義」と呼ばれる古典研究が隆興し、それまでの学問・知のあり方の枠組が大きく変わっていた時期であった。当時のドイツは、国家的統一は達成されておらず、成し遂げるための一つの方法として「ゲルマン学」という統一的な学問が必要とされた。鷗外が目撃したドイツは、まさにこうした知の胎動期・発展期にあった。新たな近代国家づくりに取り組んでいた、近代知識人としての鷗外は、ドイツ・プロイセンの学問は積極的に移植されるべきものとして摂取・吸収していた。そうした背景を踏まえ、本研究は開始された。

### 2．研究の目的

こうした見通しのもと、本研究は森鷗外の歴史叙述を手がかりに、鷗外作品全体を貫く学問の基盤を見定めることによって、鷗外が西洋からの知識をいかに日本近代の人文的学知に取り入れたか、その結果日本の近代化をどのように推進していったか、考察するものである。具体的には、(1)ドイツ・プロテスタンティズムの政治的役割とそれに対して鷗外が行った評価、(2)ドイツの知識人たちの「神話」を巡る議論と鷗外における受容の2点について、ドイツ及び日本の文献の調査・発掘を行った。その際、これらの成果を19世紀末の知的ネットワークの枠組みの中で連続的に捉えることによって、鷗外への影響関係を並行して検討をおこなう。両者の検討を通し、鷗外の歴史叙述を中心とした作品に見られる方法を、詳細な作品分析を通して多角的に考察することを目指した。

### 3．研究の方法

本研究では、ドイツの人文知から鷗外が受けた影響を探るだけでなく、何に共鳴し、何を学んだのかという観点が必要になると考える。そのため、東京大学鷗外文庫やドイツでの実地調査を基盤に据え、文献の調査・発掘という実証的な方法を目指した。同時に、鷗外の歴史叙述を中心に作品の解釈を行なうことによって、鷗外の方法を成立させた学問の基盤を具体的に定める方法をとった。

具体的な調査範囲については以下の項目に述べる。

#### (1) ドイツ・プロテスタンティズムの政治的役割と日本での受容に関する調査

鷗外「かのやうに」(1912)には、主人公五條秀麿の洋行によって19世紀末のベルリンの様

子が報告されている。その中で、秀麿は特に「ドイツの強み」として、ドイツの政治がプロテスタント神学に基づいていることを挙げ、その中心的人物であるハルナック（Adolf von Harnack,）に一定の評価を示している。この点に着目し、本研究では、「かのやうに」以下の五條秀麿ものに日本におけるドイツ・プロテスタント神学に由来する普及福音教会の赤司繫太郎の影響関係があることを明らかにする。さらに調査の範囲を広げ、プロテスタント系キリスト教の雑誌『真理』『六合雑誌』を調査することによって、日本での受容についても考察する。

#### （２）19世紀ドイツの文化史家、グスタフ・フライタークの活動調査

鷗外の歴史叙述に影響を与えた可能性のある歴史家として、19世紀ドイツで活躍した文化史家であり、作家、ジャーナリストでもあったグスタフ・フライターク（Gustav Freytag, 1816-1895）の活動調査を行う。具体的には、鷗外がドイツ留学時代に高く評価した歴史小説『Die Ahnen』、ドイツ統一という政治的役割も担った週刊誌『Die Grenzboten』、フライタークによるドイツ史『Bilder aus der deutschen Vergangenheit』を調査対象とする。小説を書き、雑誌を創刊し、文化史・国民史を完成させようとしていたフライタークの活動は、ドイツから帰国後の鷗外の日本における活動と重なり合う。フライタークの著作は、東京大学鷗外文庫にも数冊所蔵されている。したがって、鷗外の読書歴も参照しながら調査を進める。調査対象は、ほぼ邦訳のない状態であり、フライタークの個々の活動に関する研究はあるものの、相対的な評価はなされていないため、ドイツでの調査が必要不可欠である。

#### 4. 研究成果

調査の結果、以下のような結果が出た。

本研究では、鷗外の歴史叙述との関連から19世紀末のドイツの人文知の状況を調査し、鷗外のドイツで得た教養を具体的に明らかにする作業を進めてきた。その過程で鷗外のドイツ認識を把握する上で、プロテスタント神学を考えることが重要であると考え、ドイツ由来のプロテスタンティズムである普及福音教会との接点を確認することができた。中でも普及福音教会の牧師であった赤司繫太郎は、ドイツの啓蒙家レッシングを通して接点があり、鷗外の活動を総合的に捉える上で普及福音教会の動向が有効な視座であることが明らかになった。

従来の鷗外研究においては、鷗外の蔵書調査や鷗外自筆書き込み、自筆メモの検討を通して、西洋からの個々の影響関係については明らかにされつつあるが、そこから何を学び、どのように作品に反映されているのかという具体的な研究調査はほとんど存在しない。例えば、「かのやうに」以下の五條秀麿ものは、従来、大逆事件後の明治末期の閉塞状況が生み出した作品とされてきた。そうした閉塞状況の中、明治44年ファイヒンガー『かのやうにの哲学』（Die Philosophie des Als Ob, 1911）が出版され、それを短時間で読了した鷗外が、そこで展開される議論を基に「かのやうに」を書き上げたとされてきた。しかし、鷗外のドイツ・プロテスタンティズム理解がドイツ留学時代から帰国後にかけて長期にかけてなされていたことを考え合わせると、秀麿ものの書かれる契機は重層的に捉えるべきであると考えられる。

普及福音教会の赤司繫太郎を通して、鷗外のレッシング受容やドイツ・ロマン主義理解を見た場合、鷗外の「神話」の理解は近代日本の同時代的関心を共有したのものとして理解することができた。ドイツ・ロマン主義の芸術家たちにとって、「神話」へのまなざしは近代の再構成であると同時に、過去を蘇らせる行為でもあった。

晩年の鷗外の歴史小説・史伝をここに重ね合わせるならば、鷗外にとっての「歴史」は、過去の歴史を新たな「神話」として描き直すための作業だったと考えることが可能となった。一方で、赤司は道徳が宗教の発展に重要であるとする普及福音教会の信仰によって、過去の神話に今につながる「神秘」を見ていた。両者の交わりは、信仰なき理性の時代としての近代知識人にとって避けて通れない問題を共有していたからだと考えることができる。

本研究では、鷗外や赤司を相対的に捉える視座として、キリスト教社会主義者の木下尚江の作品も検討してきた。近代日本のキリスト教受容の過程で必ず議論にのぼってきた、「霊」「肉」の二項対立を木下尚江がどのように扱っているのかを考えるため、小説『霊か肉か』に着目し、明治キリスト社の公共性の一つのあり方として本作を位置付けた。木下尚江は、普及福音教会の赤司繁太郎とも交わり、共同で雑誌を発刊したことで知られている。「新神学」として異端扱いされた普及福音教会だが、英米系のキリスト教とは異なる形で、近代日本の公共性に大きな影響をもたらしたことが明らかとなった。

本研究では、ドイツでの調査を前提としていたが、海外渡航が困難であったことから、異なるアプローチによってプロテスタンティズムの問題を考えることにした。その結果、木下と赤司が共同で発刊した雑誌『新紀元』にたどり着くことができた。『新紀元』や普及福音教会については、基礎的な研究から進めていく必要が今後もあると考える。

主な発表論文などは以下の通りである。

- ・村上祐紀「「美しい目の視線は遠い、遠い所に」—森鷗外「安井夫人」とドイツ・ロマン主義」(『人文・自然・人間科学研究』、拓殖大学人文科学研究所、第47号、225頁～240頁、2022年)
- ・村上祐紀「明治キリスト者の公共性 木下尚江『霊か肉か』」(『人文・自然・人間科学研究』、拓殖大学人文科学研究所、第45号、142頁～158頁、2021年)
- ・村上祐紀「森鷗外「レッシングが事を記す」 - 普及福音教会と『賢者ナータン』」(『鷗外』、森鷗外記念会、107集、1頁～20頁、2020年)
- ・村上祐紀「普及福音教会と森鷗外「鎚一下」」(『人文・自然・人間科学研究』、拓殖大学人文科学研究所、136頁～150頁、2020年)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 村上祐紀	4. 巻 107
2. 論文標題 森鷗外「レッシングが事を記す」 - 普及福音教会と『賢者ナータン』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鷗外	6. 最初と最後の頁 1 - 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村上祐紀	4. 巻 45
2. 論文標題 明治キリスト者の公共性 - 木下尚江『霊か肉か』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文・自然・人間科学研究	6. 最初と最後の頁 142 - 158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村上祐紀	4. 巻 43
2. 論文標題 普及福音教会と森鷗外「鈍一下」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文・自然・人間科学研究	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村上祐紀	4. 巻 38
2. 論文標題 森鷗外、統計学論争のプロブレマティーク	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人文・自然・人間科学研究	6. 最初と最後の頁 1 - 15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 村上祐紀	4. 巻 47
2. 論文標題 「美しい目の視線は遠い、遠い所に」 森鷗外「安井夫人」とドイツ・ロマン主義	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文・自然・人間科学研究	6. 最初と最後の頁 225 - 240
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 村上祐紀	4. 発行年 2018年
2. 出版社 翰林書房	5. 総ページ数 239
3. 書名 森鷗外の歴史地図	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関